



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 8 月 8 日 (金)

発行 館長 加藤 智 一

8 月 8 日は「リユース」の日

「8 月 8 日」は、数字の「8」が横に並ぶことで無限 (∞) の記号を連想させます。これは「モノが人から人へと循環し続ける無限のサイクル」を象徴しており、「リユース」の理念と一致していると思いませんか。そこで今回は、本日 8 月 8 日「リユースの日」に因んで、「循環の美学」を語りたいと思います。使い捨て文化に一石を投じ、持続可能な社会の実現に向けた意識を高めるための象徴的な日となるのでしょうか。

リユースとは、単に「もう一度使う」ことではありません。それは、モノに宿る価値を見直し、時間と手間をかけて再び命を吹き込む行為です。そこには、技術、文化、倫理が交差する奥深い世界が広がっています。「リユース」の概念をより精緻に理解するには、まず「リファブ (refurbishment)」と「リマン (remanufacturing)」という言葉に目を向ける必要があるでしょう。現在私たちが頻繁に耳にする機会がある「リユース (Reuse)」とは、簡単に言ってしまうと、製品をそのまま、または軽微な修理・清掃を施して再利用することです。しかしその内容を詳しく見てみると、例えば中古スマートフォンの再整備、家電の再塗装のように、製品の外観や機能のある程度回復させると言った再生処理を意味する「リファブ (Refurbishment)・中程度の修理」や自動車部品、産業機械、プリンターのトナーカートリッジのように、製品を分解し、部品単位で検査・修理・交換を行い、新品同様の性能にまで回復させる高度な再製造とも言える「リマン (Remanufacturing)・工業的な再製造」があります。

(1) 「リファブ」の魅力：再生と個性の共存

「リファブ」はより柔軟で創造的な「リユース」の形態です。中古の家具を再塗装して新しい色合いを与えたり、古いパソコンに新しい OS をインストールして再活用したりすることは、「リファブ」の典型例です。ここでは、単なる機能回復だけでなく、個性や美意識が加わることで、製品が「再生」されるだけでなく「再創造」されるのです。また「リファブ」は、地域経済や雇用創出にも貢献します。地元の職人や小規模事業者が、「リファブ」によって新たな価値を生み出すことで、地域に根ざした循環型経済が育まれるのです。

(2) 「リマン」の世界：技術と倫理の融合

「リマン」は、単なる修理とは異なります。例えば、自動車のエンジンを「リマン」する場合、エンジンを完全に分解し、摩耗した部品を交換し、再組立て・検査を経て、新品同様の性能を保証します。これは、製造業の高度な技術力と品質管理が求められるプロセスであり、環境負荷の低減と資源の有効活用を両立させる理想的な手法です。またリマンは、倫理的な選択でもあります。新品を作るためには、原材料の採掘、加工、輸送など多くのエネルギーと資源が必要です。「リマン」によって製品寿命を延ばすことは、地球環境への負荷を減らすだけでなく、製品に込められた人間の知恵や労力を尊重する行為でもあるのです。

(3) 「リユース」文化の未来：消費から循環へ

「リユース」、「リファブ」、「リマン」、これらの概念は、単なる技術的な分類ではなく、私たちの消費行動や価値観の転換を促すものです。大量生産・大量消費の時代から、持続可能で循環的な社会へと移行するためには、「使い捨て」から「使い続ける」への意識改革が不可欠です。日本には、古くから「もったいない」という言葉があります。これは、物の命を尊び、無駄を避けるという精神を表しています。「リユースの日」は、この「もったいない」の心を現代に再解釈し、技術と文化を融合させた新しいライフスタイルを考えるきっかけとなるのではないのでしょうか。

今、「リユース」は製造業で注目されつつあります。その背景には低炭素型製品へのシフトがあります。高付加製品は、特注や少量生産となって、結果アフターサービスや保証が手薄となり、故障すると稼働に影響が出るといったリスクがあります。高品質の「リユース」を提供する企業は今後、モノづくりの救世主になるかもしれません。さて、あなたならどんなモノを「リユース」してみたいですか？それが単なる再利用ではなく、物語を紡ぎ直す行為になるかもしれませんよ。



REDUCE



REUSE



RECYCLE

